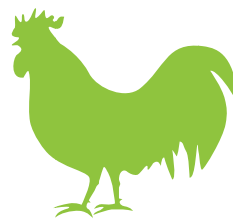


# 鶏肉

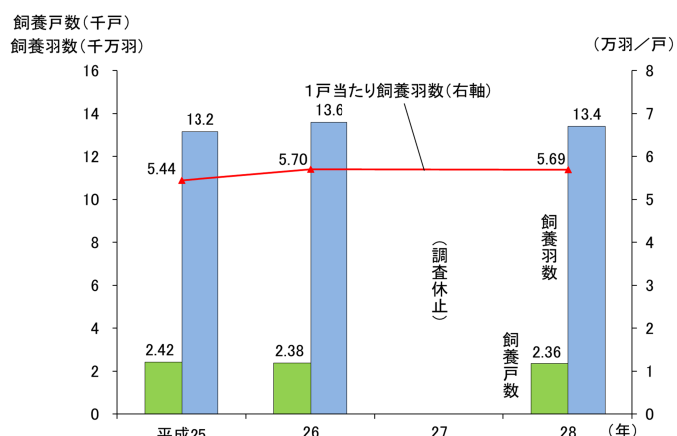


## ◆飼養動向

### ブロイラー飼養戸数、減少傾向で推移

ブロイラーの飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、平成28年は2360戸（26年比0.8%減）となった。一方、ブロイラーの飼養羽数は、近年は増加傾向で推移しているものの、28年は1億3439万5000羽（同1.0%減）と26年を下回った。この結果、1戸当たりの飼養羽数は100羽減少して5万6900羽（同0.2%減）となった（図1）。一方、1戸当たりの出荷羽数は、26年に引き続き増加していることから、大手企業によるインテグレーションの進展など生産の集約傾向が強まっていると考えられる。

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。

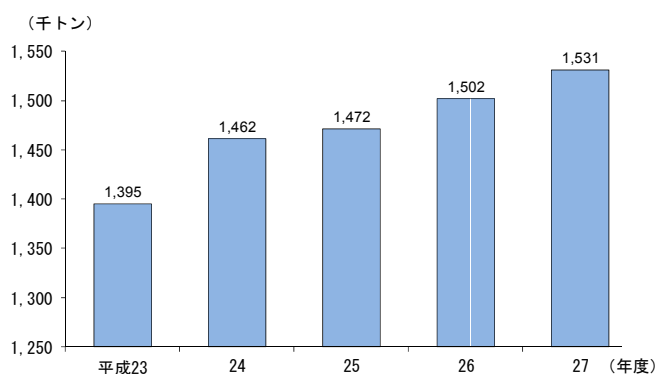
注2：平成27年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

## ◆生産

### 27年度の鶏肉生産量、5年連続増加で過去最高を更新

鶏肉の生産量は、品種改良や飼料改良による増体成績の向上や、消費者の経済性志向や国産志向の高まりなどを反映して、増加傾向で推移している。25年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、147万1600トン（同0.7%増）と前年度をわずかに上回った。26年度以降もこの傾向が継続し、26年度は150万1800トン（同2.1%増）、27年度は153万800トン（同1.9%増）といずれも前年度をわずかに上回り、過去最高を更新した（図2）。

図2 鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：骨付き肉ベース。

## ◆ 輸 入

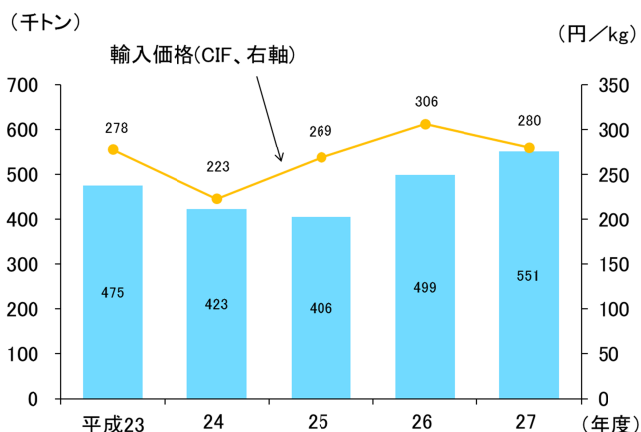
### 27年度の鶏肉輸入量、14年ぶりの50万トン超え

#### 鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品の大半は主に加工・業務向けに利用される冷凍品である。

輸入量は、平成25年度は、飼料価格高などによる現地価格の高止まり、為替の円安傾向などの影響を受けて、40万5600トン（前年度比4.1%減）とやや減少した。26年度は、加工・業務用需要の増加や25年末にタイ産の輸入停止措置が解除されたことなどを背景に、49万8700トン（同22.9%増）と大幅に増加した。27年度は、国産鶏肉の相場高や、輸入価格（CIF価格）が低下したことなどの影響から、55万900トン（同10.5%増）と14年ぶりに50万トンを超える水準となった（図3）。

図3 鶏肉の輸入量および輸入価格



資料：財務省「貿易統計」  
注1：実量ベース。  
2：生鮮、冷蔵品を除く

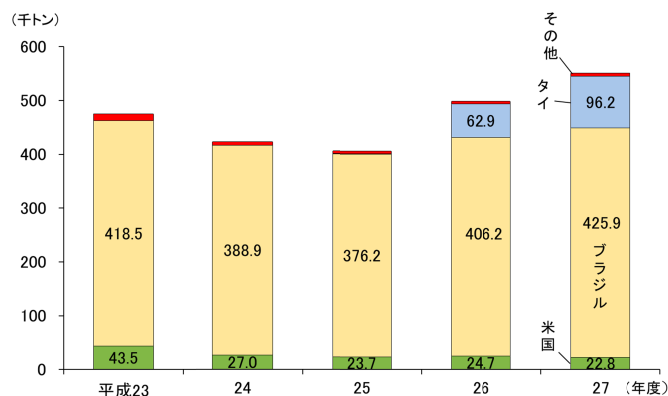
国別に見ると、全体の約8割を占めるブラジルが最大の供給国であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、27年度は、リアル安や、現地の相場安を受け、42万5900トン（同4.9%増）とやや増加した。

タイからの輸入量は、16年1月の高病原性鳥インフルエンザ発生に伴う輸入停止措置が25年末に解除となって以降、急増している。27年度は、前年度に続き、規格の正確性を求める業務筋からの需要増の動きも見られ、9万6200トン（同53.0%増）と大幅に増加した。

米国からの輸入量は、クリスマス需要向けなどの骨付きもも肉が多くを占めるが、17年度以降、高病原性鳥インフルエンザの発生により、発生州に対して、たびたび輸入停止措置が取られている。24年度以降は2万トン台で推移しており、27年度は、2万2800トン（同8.0%減）とかなりの程度減少した（図4）。

図4 鶏肉の国別輸入量

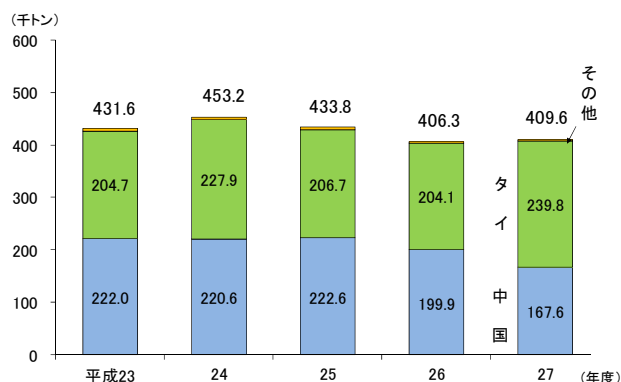


資料：財務省「貿易統計」  
注：実量ベース。

## 鶏肉調製品

鶏肉調製品（加熱処理された唐揚げ、焼き鳥、チキンナゲットなど）の輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入相手国における高病原性鳥インフルエンザの発生などを背景に、増加傾向で推移していた。鶏肉調製品は、主に加熱処理施設が多数存在する中国、タイから輸入されており、平成25年度は、飼料価格高などによる現地価格の上昇、為替の円安傾向などの影響を受けて、43万3800トン（前年度比4.3%減）とやや減少したものの、前年度に引き続き、生鮮鶏肉輸入量を上回った。しかし、26年度は、7月に中国産「消費期限切れ鶏肉」問題が発生した影響により、中国からの輸入量が減少し、40万6300トン（同6.3%減）とかなりの程度減少した。27年度は、前年並みの40万9600トン（同0.8%増）となったが、中国産からタイ産へのシフトが顕著となった（図5）。

図5 鶏肉調製品の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

注：1602-32-290（基本関税率8.0%、但し、WTO加盟国（中国）は6.0%、EPA締結国（タイ）は3.0%）。

## ◆消費

### 27年度の推定出回り量、過去最高の200万トン超え

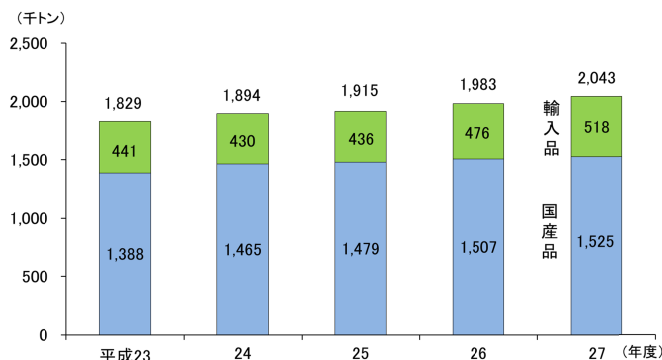
鶏肉の推定出回り量は、近年、他の食肉に対する価格優位性に支えられた需要増大や消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

平成27年度は、204万2600トン（前年度比3.0%増）とやや増加し、過去最高を更新した。

全体の約4分の3を占める国産品は、中国産「消費期限切れ鶏肉」問題が発生した影響を背景とした消費者の国産志向の高まりなどを受けて、増加傾向で推移しており、27年度は152万5000トン（同1.2%増）となった。

一方、輸入品は、鶏肉調製品との競合や現地相場の変動などにより、22年度以降、43～44万トン程度で推移しており、25年度は、43万5700トン（同1.4%増）となった。26年度は、消費者の低価格志向や加工・業務用需要の高まりから輸入量が増加したことにより、47万6300トン（同9.3%増）とかなりの程度増加し、27年度も、51万7600トン（同8.7%増）とかなりの程度増加した（図6）。

図6 鶏肉の推定出回り量

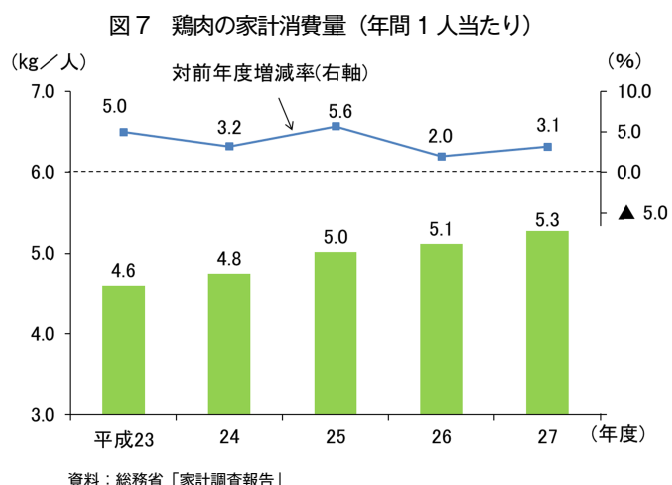


資料：農林水産省「食鳥流通統計」、財務省「貿易統計」より  
農畜産業振興機構で推計

注：実量ベース。

## 家計消費

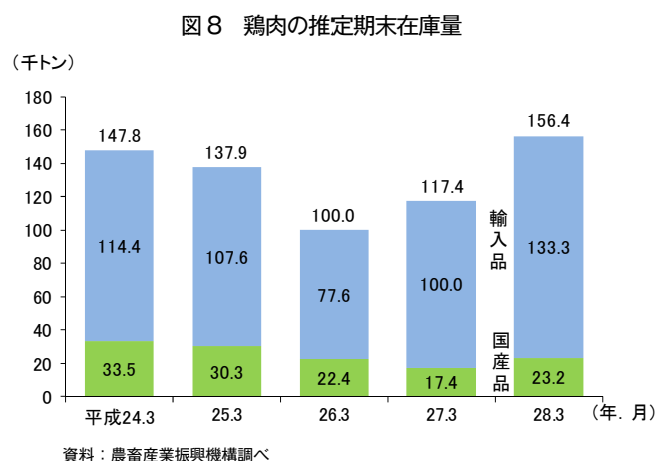
鶏肉消費量の約4割を占める家計消費量は、他の食肉に対する価格優位性や消費者の健康志向を反映し、堅調に推移している。平成25年度以降は、消費者の根強い経済性志向を反映し、年間1人当たり5.0キログラム（前年度比5.6%増）、26年度は同5.1キログラム（同2.0%増）、27年度は同5.3キログラム（同3.1%増）と増加傾向で推移している（図7）。



## ◆在庫

### 27年度の推定期末在庫量、33.3%の大幅増加

鶏肉の推定期末在庫量は、その8割以上を輸入品が占めることから、輸入量の変動に大きく左右される。平成25年度は、現地価格の高止まりなどにより輸入量が減少したほか、加工用需要の増加などを受けて、10万トン（前年度比27.5%減）と大幅に減少した。26年度は、国産品が減少した一方で、輸入量が増加した結果、11万7400トン（同17.3%増）と大幅に増加した。27年度は、出回り量が好調に推移した一方で、需要を上回る高水準の輸入量となったため、15万6400トン（同33.3%増）と大幅に増加した（図8）。



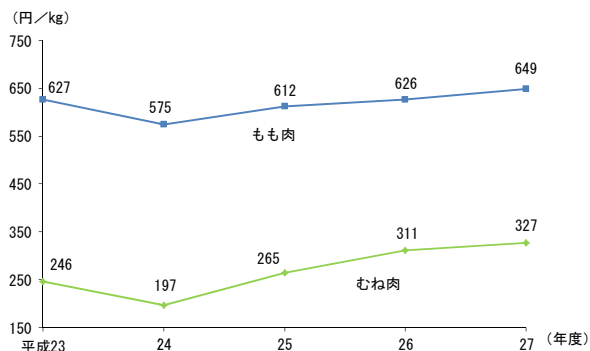
## ◆卸売価格

### 27年度の鶏肉卸売価格、もも肉・むね肉ともに堅調に推移

国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）のうち、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」については、平成25年度は、年度後半の在庫量の減少や現地相場高や為替の円安傾向による輸入量の減少に加え、猛暑の影響や年末需要の増加を受けて、1キログラム当たり612円（前年度比6.4%高）とかなりの程度上昇した。26年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な消費を受けて、同626円（同2.4%高）とわずかに上昇した。27年度は、この傾向が続き、同649円（同3.7%高）に上昇した。

一方、蒸し鶏などの総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」は、25年度は、加工・業務用需要の増加により、回復基調で推移し、同265円（同34.5%高）と大幅に上昇した。26年度以降も引き続き、加工・業務用需要が旺盛だったことから、26年度は同311円（同17.5%高）、27年度は同327円（同5.0%高）と上昇した（図9）。

図9 国産鶏肉の卸売価格



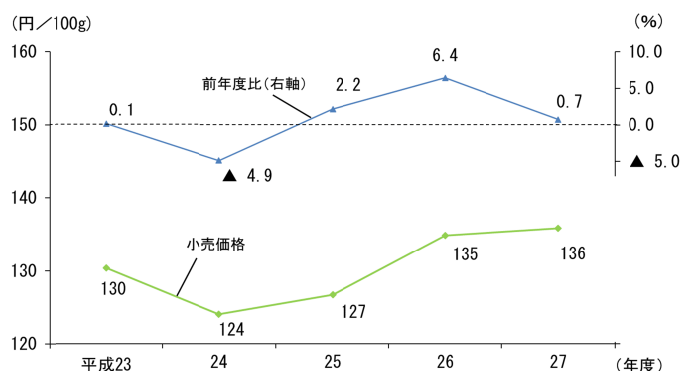
資料：農林水産省「食鳥市況情報」  
注：消費税を含まない。

## ◆小売価格

### 27年度の小売価格（もも肉）、0.7%上昇で過去最高を更新

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、25年度は、他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、100グラム当たり127円（前年度比2.2%高）とわずかに上昇した。26年度以降もこの傾向が継続し、26年度は同135円（同6.4%高）、27年度は同136円（同0.7%高）と上昇した（図10）。

図10 鶏肉の小売価格（もも肉・東京）



資料：総務省「小売物価統計調査報告」  
注：消費税を含む。